

マイクロスコープを用いて歯冠長延長術を行った一症例
Case of using micro scope
1 engthning procedure

たかしな歯科医院
小島章広
Takashina dental office
Akihiro Kojima



「緒言」

天然歯における臨床的歯冠長延長術は予測性の高い切除療法であり時に再補綴、再修復治療時において必要とされる歴史ある確立された術式である。しかし本術式は処置隣在歯に対しての浸襲を避けにくい処置であり一歯に対してのみ処置を行い、同時に審美部位等においては切開線の設定などに苦慮する場合も多い。

そして隣在歯がインプラント補綴歯で、健全な状況であれば殊更外科的浸襲を避けたいのが本音であり必要な処置とのジレンマに苦慮する事も少なくない。このような処置においては無用な浸襲を回避するため拡大下による処置は有用であると考える。

「方法」

本症例ではインプラント補綴歯と健全天然歯を隣在歯に持つ左下第一小臼歯に対して深い歯肉縁下カリエスの除去および生物学的幅径の再構築を目的に歯冠長延長術を行った。術式は何ら肉眼での処置と変わる事はないが、一連の処置をマイクロスコープを用い極力繊細に行う事に努めた。

両隣在歯は健康な状態を保っていたためそれらには可及的にダメージを与えず、治療当該歯の生物学的副径の確保をしつつ角化歯肉の温存を両立させる為に Apically positioned flap を用いた歯冠長延長術を行ったのち、歯冠修復を行った。

「結果」

一連の全ての処置をマイクロスコープによる拡大視野にて行う事により繊細な手技が可能となり術後の癒痕形成も少なく、修復の精度も充分満足できる結果を得られた。

「考察」

緒言でも述べたが、臨床的歯冠長延長術は隣在歯に対する浸襲を避けにくい処置である。

その隣在歯が天然歯であれば歯根膜を持つ為多少の浸襲を伴っても術後の自然治癒を期待しやすいがインプラント修復歯においては現在はやや解釈に変化が見られるもののプロービングすら禁忌との意見もあり安定している状態にあるものにメスを入れるなど論外である。

しかしながら本ケースのようにインプラントと天然歯が隣在する歯列においては天然歯の安易な抜歯を避け保存のため外科処置が必要な場合もある。

このような場合では術野も小さく、行いたい処置も繊細なためマイクロスコープにおける強拡大が大きな意味を持つてくる。

そして裸眼もしくは低倍率の拡大鏡に比べてはるかに多くの情報を得ながら手術を行える事が最大のメリットであり本症例においてもそれにより良好な結果を得る事が出来たと考える。

又、昨今のインプラント治療の隆盛において今後このような処置の機会も増えてくると思われ、可及的に浸襲の少ない手術のためにマイクロスコープ下での処置が出来る事は大変有利だと考えられる。